

## 第9回高等学校改革プラン推進委員会（第一推進委員会）議事録

1 日時 平成17年10月10日（月）午後9時30分～午後0時30分

2 場所 長野県庁西庁舎 401号会議室

3 出席委員

中村 正行委員長	市川浩一郎委員
森野 貞雄副委員長	若麻績享則委員
青木 一委員	清水 保委員
中沢 一委員	坂口 昌夫委員
小山 元彦委員	小山 壽一委員
塚田 芳樹委員	宮本 精一委員
牧 重信委員	丸山 稔委員

4 開会

（三澤教育支援主事）

皆さま、おはようございます。

それでは、定刻となりましたのでお願いしたいと思います。

委員長さま、よろしくお願いいたします。

（中村委員長）

皆さま、おはようございます。

本日も、活発なご議論をお願いしたいと思います。今日は事務局のほうから用意していただきました資料について、まずご説明いただき、その質疑を最初に行いたいと思います。

そのあと、今までどおり魅力ある高等学校づくりに関する事項、それから再編整備に関する事項ということで、できるだけ具体的な内容に触れて進めていきたいと思います。

前回の終わりに、第8回の終わりのところで、この委員会の進め方等についても多少ご議論をいただきましたので、その辺も含めまして資料の説明の質疑応答のあと、もう一度皆さんにお諮りして進めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは事務局のほうから、資料の説明をお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課三澤教育支援主事から資料説明（説明内容省略）

6 議事

（中村委員長）

ありがとうございました。

ただいまご説明いただきました資料の内容について、ご質問がありましたら、まずお願いいたします。

( 若麻績委員 )

まず資料 2 番の、多部制・単位制高校の配置の新潟県のものにつきまして、確か前回の推進委員会から出た資料で、近隣のということからきたのかと思いますが、まず一点は多部制・単位制高校の配置で、新潟県を選ばれた理由をお聞かせいただきたいと思います。

それから新潟県の中の事例をもう少し細部のところを見たら、静岡のほうも出てきたのですが、それに関連して新潟をなぜ出されたかということと、それと同時にこの新潟は、いつからこのような体制になったのかということについてお願いします。

( 中村委員長 )

事務局お願いします。

( 三澤教育支援主事 )

前回、他県の状況ということで、近隣のところで新潟県、「例えば新潟県などはどうでしょうか」ということでお話がありましたので、新潟県の一部制・単位制高校の配置状況、特に新潟県の場合には多部制・単位制が 8 校ということで、多少多く設置されておりますので配置の状況がわかるのではないかとということで、お示しさせていただきました。

それと、新潟県は少し方針としては長野県とは違うところがございますが、夜間課程をすべて募集停止をしていくという方向でございます。夜間定時制課程については、県内の募集学級数について昭和 50 年のときには 36 学級あったようであります。平成 8 年には 8 学級、そして平成 17 年には、資料の中には夜間の定時制は書いてありませんが、5 学級程度になっているということでございます。

新潟県では、年度を追いまして少し前からこのような体制づくりをしていっているところであります。

静岡のほうの多部制・単位制ですが、ほかの推進委員会で求められた資料として、静岡県のものをお出ししましたが、その際今までご紹介したものとはまた違う、特徴のある多部制・単位制高校なのではないかとということで、ほかの推進委員会でもご覧いただいて参考にいただければということで、提出させていただきました。

以上です。

( 中村委員長 )

若麻績委員、よろしいでしょうか。

( 若麻績委員 )

はい、わかりました。

新潟のほうはそうすると、一斉に始まったということではなくて、段階的に始まっていったという認識でよろしいですか。

(三澤教育支援主事)

細かい部分まではわかりかねるところもございますが、先ほどのお話のとおり一斉にということではなくて、だんだんと進めていっているという状況であります。

(中村委員長)

ほかに、ございますでしょうか。

(森野副委員長)

お願いします。

資料1であります。実業高校の卒業生の受け入れ先での現状が記載されております。総体的に見ますと、それぞれA社、「戦力にはならない。」B社、「研修が必要になってくる」と。それからC社の場合も、「戦力とはならず」と微妙な表現になっていますね。それからD社の場合も、「工業科があるに越したことはないが、なくなると困るというほど深刻ではない。」との記載です。

そうするとこの存在価値というものは、どういうふうに評価していったらいいのかと。中野実業高校卒業生の評価。この文面からいくと存在価値が、必要なくなってくるというような観点から、これからの総合高校というものへの足掛かりになってくるようなふうに見えるわけですが、いかがなものでございましょうか。

(中村委員長)

どういたしましょう。これは職業高校の必要性、あるいは総合学科高校との関係で、議論の対象だと思いますので、質問というよりは推進委員会の議論の中のほうで取り扱わせていただければよろしいでしょうか。

資料の説明に関して、ご質問等がありましたら、まずお願いしたいと思います。

(小山(壽)委員)

資料の4ですが、生徒が減少していくことによって、統合をしなくても学級減は進行していくわけですね。学級減が進行していけば、教員定数が減少していく。そういう状況があるわけですが、この教員の人件費の削減というのは、現在と恐らく比較したものだろうと思うんです。

そうすると自然減、学級が減少していくことによって、出てくる自然減がどのくらいで、統合したことによって減少するのがどのくらいかというようなことも、比較しておく必要があるのかなと、そんなふうには思うんです。それと人件費、一人当たりどのくらいで計算されているのか、その辺についてちょっと話していただければと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いいたします。

(吉江高校教育課長)

すみません、お答えいたします。

当然ながら今、小山(壽)委員さんからお話がありましたように、自然減の見込みというようなものは出しております。それでここでいろいろご意見はあろうかと思いますが、自然減とそれから再編整備後の数との差が、今お示した数字ということでご理解いただきたいと思います。

ですから当然それ以外に自然減によるものがありますが、ただいろいろなご意見はございますが、私どもとしましては、そういうような数字をあまり具体的に出すのはいかがかというのがございますのでお示ししてないのですが、統合にかかわる減ということでご理解いただきたいと思います。

それから単価で申し上げますと、これは単純に割り返していただきますとおわかりになりますので、また確認をいただきたいと思います。教員の場合には860万ほどということで見込んでおります。

ただこの金額、一見多いかというご意見もあろうかと思いますが、共済費の事業主負担分なども全部含めておりますので、それを含めての数字でそのくらいの数字、それで事務職の場合にも同じように割り返していただきますとおわかりになりますが、770万程度ということで同じように共済費の事業主負担分を含めて入れてあるということでご理解いただければと思います。

(中村委員長)

小山(壽)委員、よろしいでしょうか。

(小山(壽)委員)

はい、わかりました。

(丸山委員)

お願いします。

今の資料4のことですが、県財政に直接影響するというか、そういう部分についてというのはよくわからないですが、国との関係とか国の財政的な関係とか、交付金の関係とか、そういうものとの関係で、この23億円というというのが削減と書いてあるんだけど、それはどういう意味なのかというのがひとつ。ここがよくわからない。

それから23億削減されるというふうに言っていますが、それもそういう点でいくと少し多過ぎないか。例えば学校数が減ったり、職員数が減ると、一般財源の中に高校のが入っているということではあるけれども、高校数が減れば当然国のほうから来るお金も当然その試算が減るというふうに思うんですが、その辺の仕組みというか、からくりというか、その辺も説明してほしいと思います。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

以前もこの委員会でお話し申し上げた経過があったかと思いますが、義務教育、小中学校の場合には教員の人件費につきまして2分の1の国庫負担金がございます。

それが三位一体の改革絡みで今度どうなるかというような、一般財源化されるのではないかといろいろな意見がございますが、そんな状況でございます。それで、それに対しまして、高等学校の教員の経費につきましては、基本的には一般財源といえますか、国からの国庫負担金等は一切まいっておりません。

高等学校の運営費自体というのは、施設設備費も含めまして、ほとんど国からの補助金で今現在はない状況でございます。強いて言いますと、今約56、57億の授業料等収入がございますので、これが特定財源ということであっておりますが、それ以外は特定財源というようなイメージはない。

ただ地方交付税の積算上、確かにお話がございましたように、積算の根拠ということで例えばの話が生徒数とか、そういうようなものが入っておりますが、ただ地方交付税というのはご案内のように、基準財政需要額というようなものを、例えば河川延長とか道路の延長あるいは面積等によりまして積算いたしまして、そこから基準財政収入額というようなものを差引いたものが、その金額でございます。

またご案内のように、平成15年の交付税が、平成16年には三位一体の改革の影響を受けまして、長野県財政におきましても300億からの減が生じてしまっていると。これは市町村の財政においても大きな負担があったというようなことを考えますと、基本的に私も今回の減は、いわゆる地方交付税とそれから県税をもって、一般財源という言葉を使っておりますが、結果的に一般財源としての削減に通じるということで理解しています。

(坂口委員)

お願いいたします。同じく資料4で、義務教育の立場でも、やっぱり教員定数というのは非常に重く考えるというか、学校現場では子どもたちの対応に立場を変えれば少しでも加配をいただいて、多様な子どもに対応していきたいと、そんなふうに願っているわけですが、この教員の減少、165人というのは、完成年度21年においてというような、県会の先ほどの資料から見てよろしいのかどうか。

そうするとあと数年間で165人が減るということですが、自然退職とか、順次削減していくのか、そうすると新規採用との絡みもあるわけですが、そのシミュレーションというか、この165をどのように削減していくのか、そういうことをちょっとお聞かせいただければありがたいなと思いますが、以上です。

(中村委員長)

事務局、お願いいたします。

(吉江高校教育課長)

県会答弁のときには完成年度において、230名の削減というような表現になっていたかと思っております。あえて「完成年度」という表現を使いましたのは、一般質問にお答えする形で申し上げるとき、いろいろな説明が必要になってしまいますので、そういうよう

な表現にとどめさせていただいたわけなんです、仮に今お願いしているようなスケジュールでまいりますと、平成 19、20 で 21 年度に全日制は取りあえず完成形になりますが、合わせて実施する予定の定時制の場合には、4 年生までいらっしゃいますので、それを考えた場合には 22 年度が完成形になります。

ですからそういう意味で申し上げますと、21 年度と 22 年度と合わせて、最終完成は 22 年度ということになりますが、大きくは 21 年度でワンステップがございまして、22 年度でもうワンステップがあるということで、ご理解いただきたいと思います。

それから坂口委員さんがご心配されていますように、教員の定数絡みで申し上げますと、当然ながら仮に今後この計画自体が策定された段階から、私ども教員の採用の調整をしてまいりまして、その中で飲み込める数字だということと理解しておりますので、もちろん教員等の再配置というような可能性はございますが、ほかの知事部局の組織等の改正等によりましての定数の変動の場合も、同じような取り扱いをしますけれども、そのような取り扱いをしてまいりたいと考えている次第でございます。

(中村委員長)

よろしいでしょうか。

ほかに何かございますでしょうか。

(青木委員)

やはり資料 4 についてであります、ここではもしこの提案どおりという、候補案どおりということで、前提のことでのことでありますが、ここに多部制・単位制のことは盛り込まれているわけですね。ところが総合学科のことについては盛り込まれていないわけがありますから、まあそれも何か新聞報道等によっては、その部分はちょっと試算しにくいようなところをちらっとみたような気がするのですが、この資料 4 として、この影響額として出された以上、やはり総合学科のことを含めた影響額はどうかということも資料提供もあってしかるべきと思うんですが、この場においてはもう一度あらためてその辺を確認しておきたいと思います。

(中村委員長)

事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

総合学科につきましては、第四推進委員会のところはいわゆる既存の塩尻志学館高校をそのままという形になりますので、恐らくそれよりさらに膨らんだ話にはなっていないのかなと感じている次第でございますが、第一から第三の推進委員会におきまして、それぞれご検討をお願いしている次第でございますが、ただ一点不確定要素がございますのが、実は系列を何系列つくるかによりまして、講座の数が変わってきますので、それによりまして、いわゆる社会人講師の方のお願いする数が大幅に変わってまいります。

それがございます関係で、私どもは実はなかなか積算しづらいということの中で、マイナス部分として 23 億という数字はお示しましたが、プラス部分としていったいいくらか

かるかというようなことがお示しづらいというのが現状でございます。

ひとつの学校に施設整備をするとか、そういうようなものは一過性の設備投資ですから、これはこの23億とは、また別個にお考えいただかないわけにはいかないかと思っていますが、ただ既存施設でございまして、またさらに今回ご提案しているそれぞれの施設につきましては、非常に既設としてのいわゆる利用価値の高いものが多々ある、それぞれの学校だと考えていますから、大きな施設設備は仮にかからないとしても、系列を例えば塩尻志学館高校みたいに、8系列にするのか、例えば10系列にするのか、4系列にするのかによりまして、かなり金額的に動きますので、その辺がある程度見えてきた段階で、必要に応じてお出ししてまいりたいと考えている次第です。

（青木委員）

その一過性にかかる経費と通常の年々かかる経費というのは、分けて考えるべきというのは当然私もそのように思います。

でありますから、この23億円の今回の影響額というこの数字はあくまでも総合学科高校が整備されたあと、当然プラスのかかる費用が増すということも前提に置いた23億ということで、承知しておかなければいけないということを確認しておきたいと思います。

それと同時にちょっとこれは多少絡む話なので、ついでに質問させていただきたいんですが、21年が最終完成形とするならば、それと同時に19年には総合学科高校は新設開設ですよね。その間、これは中野で例えるならば、中野高校、中野実業高校の在校生の最終完成形までの間の在校生と、新設された総合学科高校での順次加わる生徒とはダブルで存在するというこの考え方でよろしいのですね。

（吉江高校教育課長）

塩尻志学館高校の場合がそうであったわけなんです、塩尻高校で平成11年度までにお入りになられた生徒さんと、それから志学館高校の総合学科のカリキュラムになったの生徒さんが2年間混在をいたしました。結果的に2年生と3年生のときに混在したわけですが、同じような形をそれぞれの学校でもお願いするというのが一般的なパターンかと考えている次第です。

（中村委員長）

よろしいでしょうか。

（若麻績委員）

今のお話に関連するのですが、先程坂口先生からご質問があったと思うんですが、これからどういうふうなシミュレーションで進んでいくのかというところが、なかなかはっきり見えていないというのが現実だと思うんです。

それで今日突然この完成年度平成21年という言葉が出てきたんですが、そこに向かって例えば多部制・単位制、それから総合学科、それから普通校、それぞれどのようなこの進ちょくを示していくのかという資料を、確か前回お願いしていたかと思っているのですが、それについてはどうなったかということを質問いたします。

(中村委員長)

事務局、お願いいたします。

スケジュールの関係は、これはやはり推進委員会中に議論をしておく必要があると思っています。前回、このような坂口委員から、進め方についてご意見をいただいておりますが、今日資料説明のあとでお図りして、また進めたいと思いますが、事務局、お願いいたします。

(三澤教育支援主事)

また次回のところで、スケジュールに関する進ちょくの形をお示しできればお示ししていきたいと考えております。よろしくお願いします。

(中村委員長)

次回ということで。

わかりました。

ほかにございますでしょうか。

(丸山委員)

いいですか。

ちょっと質問というか、あとの関係で意見みたいに、感想みたいになるんだけど、あまり議論にならないかもしれないので、2つ言いたいんですが、1つは県会の資料の中の答弁のところで、教育委員長の言った発言について、これは説明しかないですが、私の感想を述べたいと思いますけど、教育委員長が言った大学進学が魅力というような意味のことをおっしゃっていて、追求されて訂正されたけど、何というか前にこういうことがあったわけですね。

新聞報道によると、統廃合するのについて推進委員会で話をしているけれども、候補案以外にもし進学校などが統廃合される話が出たら、それは考え直してもらおうということをしたと言ったという報道があったわけです。

教育委員長のこういう考え方の基本に、やはり進学一辺倒という考えがあると思うんです。これは県民から見たら重大な問題だと思うんで、これはちょっと抗議といいますか、別に県教委に答弁してもらふことしかないけど、何かそこは我々がしっかり考えていかなければ、教育委員長のその考え方は、ちょっと間違っているという点がひとつです。

それからもうひとつです。資料1についてですが、これは私がちょっとお話をして塚田さんのほうからですか、やっていただいたということで、この前の口頭で県教委から話をしてもらったときに、文書にしてくれという話をして、これが出たわけです。それはそれでいいんですが、先ほど中沢さんのほうから話があったように、これをどうとらえるかというのは非常に大きな問題だと思うんです。

これは質問じゃないんです、意見みたいですけど。ただこれも中野地区で、県教委が来て説明したときに、この資料を基にして工業科はいらないというふうに産業界は言っているみたいなことを、県教委が言ったというふうにとらえている市民もいるわけです。

そういう点では、これはどういうふうにとらえるかというのは、すごく大事なことなん



で、そういう一方的なこの見方で県教委のほうで説明してほしくない。これはどう読み取るかというのは、非常に大きな問題ですよ。今の工業科が地域にとって、どういう役割を果たして、あるいは不足しているのがどことか、産業界から要望されている点はどういう点とか。

それは工業科の改革という点でも、非常に大きな問題なので、ちょっと資料とか最近の県教委や教育委員長の発言というのは、どうも気になるということがあるんで、ちょっとそれは意見だけ申し上げておきます。あまり今後の議論に出てこないかもしれませんので。

（中村委員長）

先ほど、森野委員からもご指摘をいただいていますので、取り扱っていきいたいと思っていますが、まず資料の質問ということでお願いします。

ほかにありませんか。なければ、毎回ご紹介いただいています、地域からの意見、あるいは各団体の状況等、委員の皆さんが把握していることをご紹介いただきたいと思います。

（青木委員）

前々回ですか。そのときに中野市にちょっと芽生えはじめた動きをご紹介したと思うんですが、かなり地域の中で議論が進行しましたので、そのご報告をさせていただきたいと思います。

今日まで、回数からいくと6回ほど準備会から踏まえまして、会が進められてまいりました。いよいよ今月の末ごろを目指して、市民会議的なものに移行をしていくのではないかとこのような状況であります。

それは、まずメンバーから申し上げますと、対象になっている、県からのプランがあって対象になっている高校は中野高校、中野実業高校だけでありますけれども、最初のスタート段階からもう1校あります中野西高校を、ともに3校連帯感をもって地域の高校の在り方を考えようというのが基本的なスタートからの確認であります。

ですから今進められている会議メンバーは、3校のPTA、3校の同窓会、そこへプラス今中野市内には15の小中学校がありますけれども、15の小中学校のPTA。そこに経済界から法人会であったり、企業の人であったり、また地域からは区長会であったり青年会議所であったり、また商工会議所であったりJAであったり、また市の教育を預かる市教委であったり、というかなり多種他方面の方々が約40名ぐらい集まって、今、会議を進めているところであります。

そして、その会議ではもうすでに県外の総合学科高校の視察も行っています。またこれからの会議日程の中では、総合学科高校の、もうすでに進んで実績のある高校から現場の声をお聞きする。また総合学科高校を創立、設立した当時のいろいろな地域との連帯感といますか、その辺の動きもあったかなかったかを含めて検証しよう。

そういう段階までできているところでありまして、これは県教委が出したプランを真っ向から否定するというものだけではないということだけはお知らせをしておきたいと思えます。否定するのではなく、出されたプランを真っさらな状態で、まさに中野市の高校教育はどうあるべきかということを観点に、地域の皆さんが真剣に議論が始まったという段階であります。

そんな段階であるだけに、もともと県教委は改革にはスピードが必要ということを常におっしゃっているわけでありませうけれども、私どもはそこにはある程度私の意見も加味させていただくならば、確かに改革にはスピードが必要と言えども、そのアクセルを踏む前に、助走の段階が必要であると。その助走の前にはさらにまたウォーミングアップをする段階も必要である、そういうふうに思うわけですが、恐らくそんな話をしますと県教委のほうは、検討委員会のほうからもうすでにウォーミングアップをし、助走ももう始まっているというふうな答えがきくと返ってくるかと思います。

広く長野県民を考えたときには、決してウォーミングアップさえもされてない状況で、県教委から具体的なプランが提案されたわけですから、いよいよ長野県民が、またプランを対象校とされた地域がやっとその助走を始めたかなという段階であるんじゃないかと思っています。

ですからほんとに長野県全体の高校、魅力ある高校を考えたときには、その県民がいよいよ入り込んできたという、この議論を大事にすることがまさに、もしそのところを作為的に県教委が狙った今回のやり方だとしたら、拍手喝采（かっさい）なんでありませうけれども、残念ながら 12 月ごろまでにはそれぞれの推進委員会の結論をまとめ、そして 17 年度には県教委でプランをまとめ終わり、18 年、そして 19 年にはもうすでに着手ということでありませうから、非常にやはり拙速であるということは否めない事実だろうと思います。

ですから今、中野のことを報告しながらも、恐らくもう先ほどの事務局説明では、今月の末から来月初めには、私どもも総合学科の、また多部制・単位制ですか、その視察を行うプランが出されているわけですが、そう考えますと年内はもう 2 カ月足らずの間に何回かの会合で会議を進めていかなければいけない。まさに今、長野南高校からも前段、大変な市民の皆さんの署名活動があったわけでありませうが、そのあたりの議論を深めていかなければいけない。

ほんとに 12 月中にそれがまとまるのかということが、大変私も推進委員の 1 人として不安を覚えるわけでありませう。もしあまりにもあとのスケジュールを大事にするのではなく、今の会議が起きたという、今の議論が深まりつつあるという、この県内の事情を大事にすることが、まさに県教委の一番の今取るべき姿ではないかということ、ちょっと中野の目標を紹介しつつ申し上げさせてもらいました。

ご報告とさせていただきます。

（中村委員長）

はい、わかりました。推進委員会の議論を延ばすこと、県教委の実施計画を延ばすことに関しては、今日のところでまた検討したいと思います。議事の中でお願いしたいと思いますが、ほかに報告に関してございますか。

（小山（元）委員）

旧第 1 通学区の関係で、飯山、下水内、そして下高井の北部になりますが、岳北地区のところで、飯水岳北地区高校の将来を考える会、8 月に第 1 回をもちまして、9 月の下旬に第 2 回をもちました。各教委、団体、組織、小中学校の関係とございますが、代表約 60

名が集まったの、第2回目でございます。

そこでそれぞれのところから貴重なご意見がたくさん出ましたが、まだまだ継続中でございますして、大事に検討しているところであります。なお、その中でも代表者会を持つ必要があるというので、今月の上旬に代表者会を開きたいと思います。

その中で、あるべき姿、大事に考えていきたいというのが現在の段階であります。それぞれの意見が各団体からも出ております。なおそのほかに、飯山市でございますけれども、飯水PTA連合会が主催しまして、中学校区単位でPTAおよび地域の方々が学習会を開きたいと言うので、高等学校の運営の立場で小山壽一、飯山北高の校長先生、そして市の教育委員会の立場で私が出席しまして、それぞれ話を、説明を申し上げながら、学習会に参加しております。

なお今月の下旬にも、またひとつの地区のぜひ開きたいと言うので、出席する予定であります。現在以上のようなことであります。

(中村委員長)

ありがとうございました。

ほかにありますでしょうか。

(宮本委員)

先日、屋代南高校の同窓会の皆さんから呼ばれまして、学校改革を学ぶ会ということで、推進委員という立場で、いろいろな今までの推進委員会の流れや、話題に上がっている多部制・単位制の学校の様子や今後の推進委員会の予定についてお話を聞きました。

詳しいことは、多部制・単位制の問題のときに少し紹介したいと思いますが、印象としては、県で候補案以外で挙がっている高校の名前が推進委員会で挙がったのは初めてですので、今飯山や中野とか中心に起こっているいろいろな運動とはちょっと別に、急に挙がったものですから、不安や戸惑いが多くて、中でも賛成だとか反対だったというよりも、多部制・単位制についてとか、どういう学校なんだというようなことで、詳しく勉強していなければいけないのだろう。そのあとに今後の対応を決めたいというような状況でして、急に挙がってきた問題ですので、やはりわずかな短い時間で決められるのはちょっとというような感じの印象を受けました。

また詳しいことについては、問題のときに紹介したいと思います。

(中村委員長)

ほかにございませんか。

(清水委員)

先月9月23日だったと思いますが、前回の推進委員会のところでもご紹介がありました、定通の子どもたちによる生活体験発表北信大会が開催されました。私も出席させていただいたんですが、中村委員長さんもお見えになっていたようで、会場でお会いすることができました。

そこで各高校の代表者、選抜された子たちの発表があったわけですが、そこに出席でき

なかった子たちの作文というものも、私が帰るときにある人から渡されまして、やはり定時制においては少人数でやっていることに魅力を感じて、自分の学びの場を確保できた子がいるんですというようなお話を、お聞きしました。

現在定時制に通っている子どもたちの中には、大きな学級での学びがなかなか困難だという実態があるかなと痛感した次第です。その後新聞等にも、当日の記事が載っていましたが、ある高校の男の子なんですが、バスケットボールが好きで、一人黙々とゴールに向かってシュートをしていたんですが、そのうちに仲間ができて試合ができるようになったことを非常に喜んでいたというような記事も掲載されておりました。報告のような感想のようなもので、申し訳ないのですが以上です。

(中村委員長)

はい、ほかにございますでしょうか。

それでは私のほうから、9月30日に信州大学工学部と長野県工業教員研究会との見学交流会というものがございました。入試の説明が主だったのですが、私は入試委員ということで参加してきました。

工業高校の先生方が30名ほど、長野県内から20名ほど見えられました。工業高校側からは、どうしたらうちの生徒を取っていただけるかという要望がほとんどなんですが、大学の工学部の立場としましては、門戸は開いていると。やはり入学してから勉強をしっかりとやってほしいということで、各学科から工業高校からの出身者の勉学の実態の紹介がありました。

工業高校の生徒さんの枠というのが推薦入試のところにあります。定員は10名でございますが、大体各学科に1名から2名採りますので定員は10名なんですが、定員以上に採っております。2倍から3倍という形で、あるいは4倍ぐらい採っている学科もございますので、それ以上の生徒さんが学んでいます。

例えば長野工業の生徒さんは、1年生から4年生まで22名いらっしゃいます。ほかの工業高校の生徒さんも、たくさんおられます。概して、ちゃんと勉強をして、成績はよいほうなんですが、一部はやはり英語、数学等の学力が低いという、そういう結果にはなっております。

ただそれは、自信を持って勉強していただければ大丈夫なんですが、比較的工業高校出身だからというような言い訳をされると。そこのところがどうも、大学の先生としては気になっているという意見が各学科でありました。

もちろん一般入試の学生さんと比べて、非常によく勉強するし、専門分野において、例えば機械製図などでは、普通科出身の子よりは勉強していますから、ずっとセンスがありますから、クラスの指導的な立場で活躍されているという紹介もありました。

あとそれに関しては、基礎学力を高めてほしいというのが大学側の要望、それから工業高校の先生方からの要望としましては、どういう生徒を送り込んだらよいのかという心配があります。

それは専門高校から大学への進学というのは、かなり難しいので、例えば一般入試を受けてもなかなか受からない。トップクラスの子はいろいろな大学へ受かっていくのかもしれませんが、それ以外ですとなかなか難しいということで、推薦入試への応募がほとんど

だと思えます。

その推薦入試はワンチャンスですね。1 回失敗すると行くところがないので、浪人をするわけにはいかない。そういう状況になるので、なかなか進路指導のほうに難しいというご意見をいただきました。

ただ最近の傾向としましては、大学側はもっと広く採りたいということで、推薦も、併願をしてもいいよということもあります。昔は推薦が併願というのは考えられなかったのですが、最近はそういう状況もあります。

例えば近隣の、これは私学ですが金沢工業大学さんなどは、信大の工学部を受けているけど、という生徒さんでもぜひ受験してくださいということで、併願を認めて積極的に採っていただいているというようなことを聞きました。

ですので、大学側もこれからもっともっと門戸を広げていくと思います。基礎学力の件に関しましても、大学側で補習を行ったり、もちろん本人に勉強してもらうのが一番なんですけど、体制を整えつつありますので、もっと受験を多くしていただきたいというふうに思います。

ちょっと宣伝も入ってしまいましたが、そういう状況です。

あと先ほど事務局から資料を紹介していただいたんですが、どういう団体から要望が来ているか皆さんのところにある要望書をご覧いただきたいのですが、内容はよくお読みいただいて、また次回にでもご意見としてあるところがあれば、いただきたいと思います。

長野県経営者協会さんから、長野県高校改革プランに関する要望というのをいただいています。安川会長さんのお名前でもいただいております。

順不同ですが、県立高校の発展と存続を願う会、久保田代表世話人から高校改革プラン推進委員会についてのお願い、10 月初めにいただきました。また直接委員さんのところにも訪問されたというふうに聞いております。私のところにも、職場のほうに直接来ていただきまして、説明をしていただきました。10 月 5 日の午前中に久保田さん、小泉中条村教育長さん、松本小川村教育委員長さんがみえられて、小 1 時間程度でしょうか、30、40 分でしょうか、説明をしていただきました。多少議論をいたしました。中条高校の廃校案に反対し、提言しますということで、皆さんのところに資料を行っていると思います。よくお読みいただいて、ご検討いただきたいと思います。それから長野県高等学校教職員組合、中島執行委員長さんのお名前でも多部制・単位制高校設置に反対する声明と資料送付についてということで、断固反対しますという文面をいただいております。問題点を探るといったような資料を添付していただいております。

先ほど清水委員から紹介いただきましたが、北信高等学校定時制・通信制生徒生活体験発表大会、私も参加してきました。多様性の実態というのが、生徒の多様性の実態というのがよく見えました。実感できました。

活発に発表されたり、非常に明るい雰囲気、多くの方が集まってやっている姿を見て、これをやはりその次の段階に進めなければいけないのではないかと。少人数教育も、もちろん大事だとは思いますが、やはりもう少し発展して行く必要があるということで、多部制・単位制もやはり魅力としては考えていかなければいけないというふうに私は感じました。

それと長野市の個人の方ですが、推進委員会と県民の意見交換のお願いということで、メールを直接いただいております。傍聴者との意見交換のお願いということですが、これ

はちょっと推進委員会の中では難しいかなと私は考えます。

何か公聴会のような形で場を設けるようなことができれば、県民の皆さんと直接意見交換を推進員とすることは可能かと思うんですが、このような推進委員会の場で、参加された方だけが発言できるという、少々不平等なことになってしまいますので、推進委員会の中ではやはり傍聴はしていただきたいとは思いますが、意見交換は少々難しいかなと思います。

それとこれは教育委員会経由で私あてに、第一推進委員長中村さまということですが、長野県立中野高等学校同窓会、会長ユモトさんから。「高校改革プラン推進について(お願い)」ということばいただいています。要望と、候補案への反論と中野市内高校の在り方の考察ということで、文章をいただいております。数値のデータと、それから議論の論点ですね、文面をいただいています。

あと先ほど会議の始まる前に皆さんご覧になったとおり、長野南高校存続についてということで、長野県長野南高等学校の存続を願う会、西澤さんから直接文章をいただきました。かなりのページ数になりますので、これは次回にまた資料を配布して皆さんに検討していただこうと思います。

あと直接メールでご意見をいただいたり、個人的にいただいたりはしているのですが、文章という形ではなく雑談の域を超えないものもありますので、それは割愛させていただきます。

ほかに報告事項等ありますでしょうか。

(清水委員)

ちょっとお聞きしたいのですが。

ただ今中村委員長さんのお話の中で、一般の方がこの推進委員会について意見等を述べるということについては不可能だというお話だったんですが、それに関係しまして確か前々回だと思ったんですが、地域の方のご意見を聞くというような話題になったときに、次回の委員会で具体的な処方というか、やり方を検討しようと言って終わったと記憶しているのですが。

(中村委員長)

今私が、メールでいただいた文面をご紹介したのは、「傍聴席から発言を」ということで、それはあらかじめということではなく、この議論の中に一緒に参加されると、そのようにとらえたので、それは不可能であると。

(清水委員)

そのことと、私が今言っていることは一緒のことではないですが、それをしておりましてただいま申し上げたように、地域の方のご意見をということはどうなったのかなという。ことでお聞きしたんですが。

(中村委員長)

今日も長野南高から直接この場へ文書を提出していただきました。そういうことをイメージしていたんですが、推進委員会の中で議論していくのもよろしいかと思いますが、どうやって地域の声を反映していくか。

ひとつは今までどおり各団体、それから個人的な要望等も含めまして、委員さんからご紹介いただいているご意見ですね。そういう形で文章で配布なりして、それから私のところへ直接郵送できたもの、それから教育委員会事務局へ来たもの等、皆さん方に文書で配布して意見を集約していくというやり方ですね。

これを続けるのは、皆さんにご了解いただき今までやってきたのですが、そのほかにもということですね。ご意見を直接。多分ここで発言というのはなかなか難しいと思うんです。ですから要望書を持ってこられて、じゃあそれを委員会で紹介していく、あるいは次の検討材料にしていくということだと思います。

取り上げ方は、もちろんここでご議論いただいてよいと思います。

(丸山委員)

いいですか。

今の件に関連して、ちょっと質問といいますが、委員長さんにあるんですが、教育委員会のですが、今ここに要望書などとしてありますね。今、委員長さんのお話になったのは、まだ間に合わない部分もあるんだろうけど、いずれだから委員長さんのところに正式に届いた文書や要請、それから教育委員会に届いた第1通学区にかかわるそういうものについては、すべて資料として私たちのところに、こういうふうに届くということですよ。

(中村委員長)

はい、そのようにしております。

(丸山委員)

そうですね。

そうでなければ、なかなかたくさんあるもので、正式に文章にしたものはやはり見なければいけないなという思いもあるし、それからやっぱり委員のほうでつかんでいる、地域の動きというのは部分的なんですよ。申し訳ないですけど。委員は地域代表で選ばれているわけではないので、まったく委員のいない地域も、地域別に見るとあるわけですよ。

そういう点では、ここで出されている委員のほうでつかんだ動きというのは、委員さんが知り得たことということで、そうすると私も個人的にはいっぱい学習会しているわけで、それが全部仲間との学習会に出すのかという問題も出てくるわけですよ。

そういう点でいえば、それはそれで今までどおり出してもらっていいんですが、もうひとつさっき委員長さんがちょっとおっしゃった、ぜひ検討してもらいたいのは、傍聴者がここで発言するというのは、それは無理なのはよくわかりますから、特別なときを設けて公聴会的なものとか、やっぱり我々が聞きにいくとなると、あちこち回らなきゃならないのに時間がかかっちゃうからね。例えば、あと何回目かでは要望のある地域の、あるいは代表だったら代表やその他の人たちの意見を、時間を区切った形で発表してもらおうという

ような、そういうのも必要ではないのかなと。

これは確かに文章で読めばわかるっていえばわかるんだけど、やっぱり生の声で聞いてみたいといいますが、そういうのがあるわけです。というのはやっぱり委員が地域代表ではないという点からいくと、まったくその個々の委員にお願いをして、その個々の委員がここで発言をするということではすまない地域もあるわけで、そういう点ではぜひそういう機会を、時間がないなんて言っていないで、やっぱりどこかでつくるべきだと思います。

それからもうひとつですが、この辺今日かまたいつか議論してほしいのですが、例えば飯山とか中野なんかは、地域的な動きがでているわけですよね。そういう組織とのかかわりといいますが、それをどういうふうにしていくのか、その結論は結論で出さうと思うんで、それをここに反映させるのか、それともその前にそういう段階というか、地域の代表するような団体などとの議論をするのかという問題も含めて、やっぱり地域の声を平等にというか、網羅的に聞くということは、やっぱり何かシステムをつくらないといけないのではないかなというふうに思います。

（中村委員長）

ほかに報告等がなければ、協議のほうに入っていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

今までどおり、文章でいただいたものに関しては、委員の皆さんに事務局から配布してもらうようにしております。中には委員長あてになっていなくて、推進委員様と書いてあるんですが、皆さんのほうに行っていないものもあるわけです。その都度資料の確認をしていきたいと思います。

もしないということであれば、また言っていただければ配布したいと思います。それから一部の委員さん、例えば長野市の委員さんだけに配られている資料というのも多分ございますので、その辺も確認して、漏れのないようにしていきたいと思います。

それでは議事のほうへ入りたいと思います。議事のほうは、第8回のときに次回、今日のことですね。今日の内容をある程度議事のことを皆さんから出していただきました。

さきほど県教育委員会側の実施計画のタイムスケジュールの詳細、中身を示してほしいということですね。その辺、これは第10回、次回に資料をお示ししていただけるということですので、この辺資料を見てからのほうがよろしいのか、それから推進委員会の議論の回数、あるいは12月末までという、一定のまとめをするということも含めて多少議論をしておいたほうがいいのかというふうに思います。

それと地域の理解を得ながらということで、ただ今、丸山委員からもありました、例えば飯山中野地区、坂城も当然お話しはしていらっしゃる、それから中条もあります。それから長野南高は今日いただきました。こういうものの検討内容を反映していく方法ですね。

それから職業科についても、先ほどから出ておりますので、その辺の議論。これは一度にやるわけにいきませんから、どれか選んで優先順位を決めた上で、今日の議題としていきたいというふうに思います。

もちろんその中には、我々が検討を依頼されている総合学科高校の配置、多部制・単位制の配置、魅力づくり。配置と魅力づくりについての議論が含まれているというふうに思います。



時間がちょうど休憩時間ですので、この時計が 11 時まで休憩とさせていただきます。

#### 【休憩後再開】

(中村委員長)

それでは委員さんがおそろいですので、再開したいと思います。

議事のほうに入らせていただきます。先ほど来、実施計画のタイムスケジュール、それから委員会で検討すべき内容の報告、それから地域の理解を得ながら進めていく上では、12 月末にこだわらずにということがあろうかと思います。

実施計画のタイムスケジュール等については、第 10 回次回に資料をお示しいただけるということです。それを待って議論をしたいと思いますので、地域の理解を得ながら、この委員会を進めていく、その方法ですね。それについて、ほかに議題がありますのであまり時間を取るわけにいかないの、幾つかご意見をいただきたいと思うのですが、今までとおりこのような形で、各委員さんが把握している状況、それから各団体からの要望書を受け取りながら、議論に生かしていくという方法ですね。これを続けていくということがあろうかと思います。

それと具体的に、かなり大きな議論の輪を広げていただいて、飯山地区、中野地区では市民を上げてということで検討されています。これはぜひ意見の集約あるいはその中間の段階でも結構ですので、推進委員会としては内容を把握していきたいというふうに思いますが、いかがでしょうか。

この推進委員会の進め方のところで、皆さんの意見を聞いていくところ、何か方法なり、こうしたほうがいいのかというご意見がありましたらお願いします。

(丸山委員)

いいですか。

今、具体的には候補案で出た学校などを中心にですが、学校や同窓会およびその地域ですね。そういうところで、たくさんの資料や要望書が出ているわけです。その要望書の中には、ただ何というか言葉が悪いですが存続させてほしいという要望だけではなくいろいろな地域の資料や対案的なもの、そういうものも含めて検討している資料がたくさんあるわけです。

しかし正直言いまして、たくさんあるものだからそれをじっくり読んでたら、月に 2 回だから間に合わないですよ。申し訳ない、私も仕事をしているものですから。できるだけ読もうとしているんですけど、とてもじゃないけど、読んで私も分析して考えた上でここに参加をするという時間がなかなかないんですよ。委員の皆さんも、そうだと思います。

やっぱりある程度、そういう地域や、学校、同窓会やその他のそういう団体などで意見を述べたいと、この委員会で意見を述べたいという人については、その資料に基づいて時間を区切ってということになると思いますが、そういう会を何という名前にするのか、公聴会にするのかわかりませんが、そういう会をつくらなくても、何となく委員の中で、例えばは勉強不足だからこれを全部読んで理解をして、じゃあ地域の皆さん、ほんとにどういことを考えていらっしゃるのかというのは、よく読み取れない部分もあるわけです。

そういう点では、そういう議論をしていくことが、ほんとに地域の皆さん、地域の皆さんもほんとに、あるいは地域や加わった学校の皆さんや同窓会の皆さんも、決してただ反対の反対をしているわけではなくて、かなり真剣に考えて議論をしてやっていることだと思うんで、そういう機会をやっぱり1回か2回はつくっていくという必要があるし、そういうふうに集中した、そういう委員会を次回とか、その次のとかで設定をするということが大事だと思うし、それからさっき言いましたけれども、繰り返しですが地域的な市民的なレベルで、こういう動きになっているところについては、その結論を待っている、その結論でいいよとここで追認するというだけでいいのかなという気が、ちょっとするんですね。

その辺を議論の途中で我々も参加をするなり、何かかわりを持つといいですか、そういうことも必要だろうし、そういうことをちょっと考えていくということを、あんまり時間時間というふうにすると、実はこれから12月といたら、もうあと数回しかないわけですよ。

まとめるといったって、文章を出すわけだから、まとめるだけだって1回や2回はかかる、1回じゃとてもすまないでしょう。そうすると時間、時間でそういうことができなくなってくるので、あまり時間のことを言わずに、やっぱりそういう機会を何回か設けるということがうんと大事じゃないかなと思います。

前には部会をつくるっていう話があったですね。だけど部会をつくるとなると、組織づくりだけでまた時間がたちちゃうからね。誰を人選するかとか、部会にどんな議題でお願いをするのか。人選だけだって、1カ月以上かかるでしょ。そうすると部会をつくっていても、ちょっと現実的ではないですよ。

そういう点では、部会に代わるものとして、この場にやっぱり傍聴者から意見を言ってもらっても、それは無理でしょうから、ちゃんとした団体なり組織なり、そういうところで議論をしてきたことについて、ここで意見を発表してもらおうというようなことが必要ではないかなと思います。

(中村委員長)

はい。この推進委員会の中で時間を取って、意見発表をしてもらおうということは、2回か3回前の委員会の中でも、私が発言したというふうに思います。新聞にも報道が、小さいですが載っていたはずですので、それは可能と考えています。

ほかに関連してございますでしょうか。

(牧 委員)

今の資料として出たのですが、学校の再編整備がメインとして描かれていたのですが、今日ようやく財政的な話が出ました。教育は財政の面は、あまり考慮してあたるべきじゃないみたいなお話もあったのですが、やっぱり計画であれば、こういう大きな計画であれば、財政面、県の財政面、それから教育予算、これらの数字も、ある程度提示して、それで取り組むような形にしていけないと、いけないんじゃないかと思います。

ただ単に少子高齢化時代を迎える中で、子どもたちが少なくなっていくという状況の中での再編整備のお話を優先し、学校存続を求める地域の意見が相当数出てきております。

そういう中でまとめをする環境をつくるのであれば、ある程度教育委員会としても、今お話ししたような数字をある程度バックグラウンドを明確にし、それで最終的なまとめに入っていくような段取りをするような環境づくりというのが必要かなと思います。

ですから、ただ単に再編の問題だけではなくて、県の今後進める予算、それから教育予算等々についても、詳細な内容を提示する、そういうことが必要じゃないかなと思います。ですから私は、やっぱりそういう部分では、どういう形でまとめようと、それにつけてもそういう部分を欠如した再編のやり方というのは反対です。

そういうものをきちっと明確をして、ある程度数字で示す部分も大事じゃないかなと思います。

（中村委員長）

この推進委員会の最初のころに、やはり財政面をということで、ご意見をいただいたのですが、最初から財政面だけで語るのは、お金の問題だけで教育を語るということで、最初からは避けたいということです。推進委員会での魅力づくりの検討がかなり進みました。深く検討いただいていると思います。

議会からの要望もありまして、事務局のほうで今日いただいたような資料、またその前にはもう少し違う資料もいただいて、財政面に関しては徐々にステップを踏んで資料提出していただいていると考えます。

候補案に関して、詳細な積算をすることは多分可能だとは思いますが、それですと候補案がかなり具体性を持ってしまって、確定をしていくという方向が出てきてしまいますので、事務局のほうはそれを避けたいという最初のころのご意見でしたので、こういう状況だと思います。

徐々に詳細のところに議論が進んでいくのではないかなと思います。それには我々がきちんと魅力づくりのシステムに関して議論をしておかないといけないと私は考えています。

この次のステップもあり得るのではないかなと思います。

（牧 委員）

もう10月ですので、かなり大詰めの段階に入ってきているものですから、ですから私もタイミング的に急ぐ必要はないんじゃないかなという感じはしていますよ。この委員会の話の内容、それから地域のいろいろな要望だとか、それぞれ出ておりますので、急ぐ必要はないんじゃないかなと思いますが、ある程度バックグラウンドがしっかりした数字を明示してもらった中で、議論をしていかないとちょっとまずいかなという感じはします。

（中村委員長）

意見集約の方法、それから12月末というのにも関連してのご発言でしたが、このあたりについていかがでしょうか。

(青木委員)

先ほどの丸山委員の意見とダブることになるわけですが、私どもこの推進委員は、いずれかの時期に推進委員としての意見を、どんなまとめ方になるか、ならないか、これは別問題として、ある程度その方向性を目指していくという責任が課せられているわけです。

そのこと自体は、はなから私自身も非常に荷が重いものというふうに思っていたんですが、さてそのいろいろな方々からお話を聞く話であります、そういう大切な責務を負わされている私どもとすれば、逆に地域の皆さんの意見を聞くことはしなければいけないんじゃないかと思うんです。

ですからそのいろいろな考えをお持ちの地域の皆さんに発表の場、意見の場を与えるというのではないと思うんです。ものを言うチャンスを与えるという観点ではなくて、私どもが積極的に、そのお話を聞くという、事情を聞くという責任は果たした上で、私どもの考えはさらに議論を深めていくということの姿勢が必要なんではないかと思います。

やり方の細かな方法論については、ちょっとまだ整理はできていませんが、そのように思います。

(中村委員長)

私が以前発言したと思うんですが、こちらから満遍なく公平に、意見を聞きに、お伺いしに行くというのは、かなり難しいことというふうに思います。

それは今タイムスケジュールの議論なんですが、延ばしても多分難しいのではないでしようか。議論が進むにつれて、すべての団体、会合、関係者の意見を聞きながら進めていくというのは、これは推進委員会としての役割がぼやけてきてしまうと思いますので、それで来ていただいて説明していただくならば、機会均等ではないかなと私は考えていたのですが、その辺についていかがでしょうか。

(青木委員)

私どもの、この14人で議論を深める必要があるわけですから、毎回毎回、私どもにもちょっと発表の場をくださいということを受けるのではなくて、やはりどこか1日決めて、その回数が今日は9回目ですけど、果たしてそこをカウントする、しないは別問題として、1日1回、この3時間を、15分か20分か30分かわかりませんが、相当のご意見をお持ちの方々のケースだけは聞くことができると思うんです。

だから1回この会合をそれに当てるべきだと思っています。毎回毎回、いろいろな方々からご意見を聞くんじゃなくて、一編にやるということは必要かなと思います。

(中村委員長)

推進委員会として開催して、場所はともかくどこかに決めて、それは十分可能かなと思います。よいご提案だと思います。

(小山(元)委員)

県下4地区の中で、削減されるという見通しの数が一番多いのは、第1通学区なんですね。だからほんとに第1通学区の地区の皆さま方というのは、非常に関心を持って、特に今まで考えていなかった高校の在り方をどうすればいいかということ、地域で本当に真剣になって取り組んできているわけです。

だから、やっぱり時間がほしいなということを実感しております。ですから限られた中で検討するのなら検討は、これは大事だと思いますけれども、やはり先ほどから出ておりますように、それぞれの地域で大事に考えて、「こうあるべき姿」を大事にしたいなというものがあるわけです。

ですからそういう意見発表の場を、何らかの形でやっぱりこの推進委員会のほうへ反映できるようなことができればなと思います。青木委員さんはじめ、私たちはその地域から出てきているようなところでは、お話しすることはできますが、全部北信地区の市なら市をみているわけではございませんので、そういういろいろな方々の立場がございますから、そういう地域の方々の声も大事にしようが、何らかの形に機会はどういうふうにするかということは別にしまして、発表させていただくような機会があればと感じます。

(中沢委員)

この委員会、「何をやるべきか」という中で、高校検討プラン検討委員会というものが一昨年立ち上がって、そのときにいろいろ基本的なものが導入されたと。私たちの推進委員会は、それに基づいて県の教育委員会から、「これこれこういった面について検討して、意見を」ということで委嘱されているから、それに応える役割もあるんだなと。これは大事なことだなと思います。

ただそういう中で、当初お話があったのは、県の教育委員会がお話の前にいろいろ案を出したと。そのことについてはけしからんということで、いろいろ議論がなってきた。それがなければ、じゃあこういった推進委員会でどのように検討されたかなと。こういうふうにも危惧(きぐ)しているところでございます。

たまたま代替案、代わる案として抽象的なお話は幾つも出ているけれども、この会として本当にこうじゃないかということ、まだ論議が足りないんじゃないかと思います。たまたま各地区の皆さんから要望があると、それに耳を傾けてしまって、本論をちょっと避けているなと思います。

もちろん、その各委員がいろいろ出てきている皆さんのことの要望書などは、すべて読みこなして、それをこなしながら「これこれこうだ」という意見をつなげていかなければいけないのだろうなと思います。

こういう道筋をしっかりとしないと、外部のいろいろな皆さんの要望を勉強するだけで、自分の意見がますます縮まっていってしまうと、こういうこともあるだろうなと感じます。もちろん我々は素人だから、例えば多部制・単位制でも、私が「坂城ばかりではなくて、須坂でも長野でも考えてくださいよ。あるいはまた千曲市でも考えて」というようなお話の中でも、その後は何らそういったものについての提案の深みがないと。

そしてまた総合学科においても、総合学科は勉強したけれども、これからだという中で反対の皆さんの意見のほうが、より強く出てきているということに惑わされがちだなと、

こんなふう思うわけでございます。

そこで少し原点に戻らなければいけないのではないかなと思います。「地域に学ぶ」と、地域の子どもは地域でやっていかなければいけないということにおいても大事だし、また高校生が今のニーズが多様化している中でも、どういうふうになければならないかということ等も、みんなで勉強しなければいけないと思います。

そういう中で地域により多くの高校をとというと、今の5.5学級でひとつ理想的な高校だと位置付けるならば、7学級、8学級ある学校は、6学級ぐらいにして、より地域にそれぞれ特色ある学校を生かすことによつての経費の節減の方法だってあるじゃないかと思います。

先ほど経費の節減は23億と試算されておりますが、これがほとんど教員の経費だということになれば、いろいろと対応もできるんだらうかと、こんなふうにも思うわけでございます。

そこで言いたいのは、もう少しそれぞれの要望等を勉強して、まずこの会としてどういうふうにするか。1つに決めなくても、候補を3つ、4つに絞ってでも案を示し、なおかつこれから統合されてしまう学校そのもののほうが、より問題も潜めているんだから、そちらのほうへの論議もしていかなければいけないと、こんなふう思うわけでございます。

地域のご意見を聞く前に、この委員会として「どうだろうな」という複数の案ぐらいを互いに持ち合わせなければいけないと。その上において聞くことが大事なかと、こんなふう思う次第でございます。

(中村委員長)

はい、委員の独自の考えを深める議論をすべきというお考えだと思います。

(丸山委員)

今、中沢さんがおっしゃったことはわかるんですが、流れから行くと、候補案について議論を始めたわけですね。それはどういう問題点があるか、どういう課題があるか、それでいいのかという議論を始めて、それで坂城とさっきの多部制・単位制の話になって、多部制・単位制はかなり突っ込んだ話になって、代案的な案も出てきたわけですね。それでストップしているわけですね。

だけどほかの地域は、そういう話をこれからしていく流れになるわけですよ。例えば長野南と松代の関係、中条、犀峡の関係も、中野地区や飯山地区の関係も、まだそういう坂城の問題ほど深く、候補案についての問題点や課題を明らかに深めているということは、まずないわけですね。

そのところをやる必要はもちろんあるんですが、多少私も時間を考えているので、それは、ただその中でさっき言ったように、その候補案についてこれだけ地域や該当する学校する同窓会や、その関係の皆さんが議論をし、ただ反対だけでなく、いろいろな数字的なことも分析をして、意見を持っているわけですね。

それを要望書に出してきているわけですよ。だからそのことは、やっぱり聞きながら我々も検討すると。そうじゃないと、私正直言って、これを読んでいるんですが、時間的なこ

ともありますけど、能力的なこともありますけれども、やっぱり聞いてみたいことがいっぱいあるわけです。

つまり地域の皆さんは、これについてどういうふうを考えていらっしゃるのかなとか、どうして反対なのかなとか、どうしてこういう案が出てくるのかなというところもあるわけですよ。

そういう点では、流れとしては、この会は候補案についての分析をずっと今までしてきたから、その流れはずっとやっていくということですが、こっちがある程度、「こういう代案があるけど」というところ、もし出るとしたら出るかもしれませんが、それが出る前でも、やっぱりじゃあ我々が議論する中で、候補案についての問題点、これじゃ困るよという意見が、地域や関係者の皆さんは、どういうふうと考えていらっしゃるのかというのをきちんと聞く必要があると思うんです。

正直言って私も、全部の地域のことをいろいろな書類を読んだり、みんなとお会いして話を聞くこともありますが、完全に自身を持って地域の皆さんが、ほんとにこういうふうに言っているんだと。それについて私は、それはちょっとおかしいと思うけど、私はこう思うとかというふうに、まだしっかりつかめていないわけです。

だからそういう点では、意見のある人は、ある一定の時間を取って、時間と場所をつかって、意見のある人は申し込んでくれというようなことで、申し込まなかったところはこれはしょうがないと。意見の言いたい人は、例えば15分なら15分ですよということで、資料も持ってきてくださいと、説明も15分です、というようなことでやる必要があるのではないかと思います。

それをやりながら我々は、候補案について、そういう意見も含めながら問題点を明らかにした中で、ほかの案があるのかどうかということを、これから検討していくことが必要だというふうに思うんで、確かにこっちのほうで、ある程度違った案も出しながらということもあるかもしれませんが、そこまで言ってしまうと地域の皆さんの声が、声だけで終わってしまうし、それからさっき青木さんがおっしゃったように、やっぱり地域でこれだけ高校の問題について議論をしたというのは、多分大げさに言えば、歴史上初めてではないかと思うんです。

そういう点では、そういうことをうんと大事にしていかないと。それはそれでやりながらこっちはこっちで、権限があるからというか、責任があるからこっちはこっちで決めるよ、というのではなくて、やっぱり途中でそういう意見を、私はぜひ聞きたいなと思います。

全部聞くとなったら大変だなということがありますが、全部網羅するということになったら、今まで要望書出てきたところは助かるわけですから、それはどういうふうにするかはまた調整するとして、だから私は最低2回ぐらいは必要だと思います。

(小山(壽)委員)

地域の方々のご意見をお聞きするということは大事なことだと思います。

今までも、例えば長野南のことについて言えば、「やりますよ」という案内がありましたので、推進委員にもありましたので、推進委員の方は何人か長野南へは参加して、お話は聞いてあります。

今日出していただいた提案についても、そのときにお聞きしたことをさらに細かく、詳細にまとめられたものだと思っています。だから坂城高校についても、多部制・単位制の問題について、生徒会で文化祭のときに議論をするというお話がありましたので、それも私は参加をさせていただきました。

飯山は地元ですので、参加をしております。地域でそういうことをやるのでという案内があれば、推進委員として聞きに行くというのは、それはぜひとも必要なことだと思っています。

またその地域の声が、ある程度まとまってくればそのまとまってきたものを推進委員会でお聞きするということについて、まったく異論はありません。それはそれでぜひお聞きして自分の考えをまとめていくべきだと思っています。

ただ前々回くらいに私は申し上げましたが、根拠のない意見を言われても困ると思うわけですね。あるいはただ存続をさせてほしいという願いだけであるならば、それはもうペーパーで十分ではないかと思うわけです。

「こういう根拠があって、そしてこういうふうにぜひしてほしいんだ」というようなこととしてお聞きするということであるならば、ぜひお聞かせをいただきたいというふうに思っております。

今、そんな意味でいうと、非常に根拠の明確な要望が出されたのは、私は長野南の件と中沢委員さんの、あれは9月だったですか、この2つだけだというふうに私は思っています。従ってそういうようなレベルでの要望があれば、ぜひお聞かせをいただきたいし、また地域で話し合いが行われる、そしてそれが公開されているということであれば、今度地域での話し合いというのは、まだ明確な根拠を持って話し合いを進めるなんていうと難しいですから、単純な要望であっても、やはりそれには耳を傾ける必要があるのではないかなと思います。

だからどちらか一方でとか、そんなふうに決める必要がないのではないかというふうな気がします。だから委員長さんのほうでまとめていただければ、そういう考えでいます。

(中村委員長)

今、中沢委員からは、少し委員独自の考えを深めていく議論が先だというようなご意見。それから小山(元)委員、丸山委員、それから青木委員からは、地域の要望は重要なので委員会で取り上げていくべきということです。

やはりある程度まとまったご意見でないと、単純な存続要求というのはかえって逆効果になるのではないかと、私は個人的にある方に申し上げたことがあります。それはやはり対案を出すにしても、しっかりした内容でないと、それは単なる議論に混乱を招くだけです。

ですので、そこにデータなり、考え方なりをしっかり記されている、あるいは資料を添付していただくべきものだと思っています。ですから今、小山(壽)委員がおっしゃったような形で、ここで推進委員会の中で発言していただくというふうにしていきたいと思いますが、丸山委員からは2回ぐらい設けたらどうかということですが、推進委員会の時間の一部を割いて希望される方、多分きちんと議論をしてまとめるには、それなりの団体なり組織をつくっておられるという、ある程度制限がかかってしまうこともやむを得ないとは思いますが、そういう形でご意見を聞くということによろしいでしょうか。



(中沢委員)

地域の意見を聞くということ、私が最初にそういった提案した経過があると思うのです。坂城高校あるいはいろいろな高校の該当された高校とは、悩み悩んでいけよと。

ところがそうでない高校は、それなりに「ああよかった」と言って台風一過になっている。しかしその地域そのものに、該当になった高校には悩みがたくさんあるんだから、それをいつかのとき聞いてほしいということを提案した記憶があるわけでございます。

そうした中で、このように多くの皆さんから多様なご意見が出てきた場合には、収集がつかねるなという思いもあるわけでございます。そこで先ほど乱暴な言い方としては、資料については、みんな責任を持って勉強して、その上に立ってもう一度基本のお話をしようじゃないかと。そしてその基本のお話の中で、「ここはやっぱりこうだな。」「地域の意見も聞いてほしいし、また地域からの要望も出ているから」というように、もう少しここは委員としての中での問題掌握をした上において、そういう手法を取ることのほうが、よりまとまるかなと思います。

この12月までというご意見もあって、一般的にはこれは時間的に難しいなという思いもあるけれども、しかし課せられたそういう中で、精いっぱい努力してみても、その上での結果においてどうだ、こうだということは論じていくことが大事かなと、こんなふうに思います。

(塚田委員)

今、中沢さんが言われたように、このいわゆる「たたき台」といったようなものに、名前の出た高校は、それぞれ当然悩みがあるということはいくつかわかりますし、それぞれ存続をさせてほしいという意見も、ほんとによくわかります。

ではそういう人たち全部、それから地域のお考え持った方々全部の意見を、全部聞くということになれば、これはもう膨大な時間になってしまって、いわゆる委員会をやはり決められた期限があるので、一応効率よく進めることは当然必要だと思いますので、やはりきちっと根拠を出されて、それで少なくとも代案なりを出されているような案については、やはり考えを聞いてみる必要はあると思います。

その辺を取捨選択するのは、委員長にお任せをして、そういう場で皆さんのご意見を聞くというような機会を設けたらどうかというふうには思います。

(市川委員)

私もそれは賛成でございます。個人的な話で大変失礼ですが、長野南高のほうからいろいろなアイデアが出たのを、私も勉強させていただいて、今までと違った自分の考え、間違いもあったでしょうし、それをやっぱり大変だなと思いました。

ただ長野南高校から出された代案についても、私ももからすると疑問の点もあるので、やはりそういうところはぜひお聞きしたいし、そういうものを聞いて、この委員会で処理していかないと間違った方向へ行くのではないかなという危惧はいたします。

もうひとつは先ほどから出ているように、ここに問題が出ているのは、プラス財政の問題をやっぱり徹底的にやらないと、これもひとつの提案ができないのではないかなと思います。もうひとつ、一番最初、この委員会で始めた、魅力ある高校づくりというのも、何

となく途中で終わっているのではないかなと、その辺ももっと煮詰める必要があるのではないかと。そうすると3つの課題を、これから2カ月で大丈夫かなという、正直な疑問があります。ですからターゲットはダーゲットとして見るのですが、やった中でどうしてもダメならば、期限というのはもう少し延びても仕方ないのかなと思っています。

（中村委員長）

今、塚田委員、市川委員からご意見をいただきました。特に塚田委員からの、委員長に任せるとのご意見ですが。

（丸山委員）

基本的にそれでいいんですが、ただ難しいのは、じゃあそういうふうはどこを呼んで、どこを呼ばないかという話になると、そこはかなり難しいと思いますよ。ただ存続だけを言っているだけの、願いだけのものはダメといっても、それなりの代案とか、あるいは候補案に対する批判とかは持っているわけです。

ただ何となくつぶれたら困るだけの話ではないです、それは。ただ代案というのは、何が代案かとね。自分の学校以外に、校名挙げなければ代案じゃないのか、あるいは地域を挙げないと代案じゃないのかということ、そうでもないと思いますよ。

もっと根本的な代案もあるわけですよ。例えば数の問題なら、数をそれだけ減らすのはどうかというのも代案なわけですよ。そういう点では、あまり厳密にやっていると、代案がきちんと資料が整ってあるところだけの意見だとなると、それはちょっと何かどうやって分けるのかなというのが非常に難しいと思うんです。

今、小山先生がおっしゃったように、その2つは確かにそうかもしれませんが、ほかにもやっぱり代案的なもの、あるいは候補案に対する批判としてきちんと資料を付けているものもあるし、それからなぜいけないのかという根拠をちゃんと書いてあるものもあるわけです。

そういう点では、あんまり選ばないほうがいいと思います。議会の要望や、議会の意見書みたいなのは、それはいいと思うんですが、それは書類でいいと思いますが、少なくとも地域や学校の同窓会とか関係者は、要望書を出してきちんとしているのを、私は全部聞くべきだと。そうじゃないと差別になってしまうと。あるところは聞かない、あるところは聞くとなると、じゃあどうやってやるのか委員長にお任せするけど、委員長さんだって困るはずですよ。

そのときに、じゃあ私のところは何で聞いてくれなかったんだという話になって大問題になる。だからやっぱりそこは平等に聞く必要はある。だってつぶれるぞという候補になっているわけですから、これは大変なことですよ。

だからそういう点では、時間はないけど、やっぱり聞くんだったらちゃんと、網羅できるように聞くと。私は議会の意見書は、それはそれで文書でいいと思いますけどね。

（中村委員長）

私のほうで決めないと議論が戻ってしまいますので、一応案を出しますのでご納得いただけるかどうか。

(坂口委員)

代案というようなことで、先ほどこの会が始まる前に、長野南高校の存続を願う会の皆さんが委員長さんにお渡しした中で、「代替案を出すと敵をつくることになる」という、そんなような文言できつと書類等とお渡ししたかと思うんですが、私は非常にある面ではこういう言葉を使わなければいけない苦しさ、教育現場で「味方・敵」という言葉が出るというのは、非常に残念だなと思います。

気持ちは非常にわかるわけであります。当然自分の学校を存続させるためにはどこかをということでの、きつと「敵」であり、あるいは他からいろいろ批判を浴びるだろうからということに使われたかと思うんですが、先ほど丸山委員さんが言ったように、こちらで取捨選択して聞くと、確かに問題はあるなと思います。かといつてのべつ幕無し、どのくらいの希望者が来るのかわからないと。

しかし原則的には、やはり我々に声を発したいというものは原則にしなければいけないのかなと思います。私もいろいろなところからお誘いがあって、正直学校の会議とか出る機会がほとんどなく、地域の皆さんの声を直接聞いているということはほとんどありません。非常に申し訳なかったなという、そういう心もあるわけであります。ですから機会があれば、そういった声をお聞きしたいと思います。

もうひとつ、これは高校生が非常に熱心に動いているということ、報道でしかわからないわけでありますがお聞きしております。最初は統廃合のかかわる生徒会等だけが、だんだんもっと輪を広げて、直接関係のない名前の挙がっていない高校生も動きだして連携を深めていると。そういったものに対して、私どもはどう耳を傾けるのかというのも、ひとつ課題なのかなと感じます。

これも非常に難しい問題で、聞けば聞くほど我々は迷うわけであり、高校生はほんとにきちっとした資料、あるいは的確な判断材料等用意できるかわからないわけでありますが、やはり今いる高校生、あるいはこれから高校に入る中学生、そういったところまで広げると、ほんとに際限ないわけでありますが、意識とすれば我々は何とか大事にしていかなければいけないのかな、そんなことも思います。

それからもう一点、これも難しいわけでありますが、ことし山梨へ会議で行った折に、新聞でやはり高校再編でいろいろ動いていると。その中で、総合学科になる幾つかの高校が、先生方が非常に意欲的に、情熱的に動いているという、そういう紹介の新聞記事を目にしました。

そういった関係で、高校の先生方の意欲というのは現在どういう状況にあるのかなというのも、正直気になるところであります。これは今ここで「どうこう」というわけには、いかないですが、高校の先生方がどんな思いでこの改革に声を発しているのか、そのあたりも非常に気になるところであります。

いろいろお話しさせていただきましたが、いずれにしる代案の有無などそういうことなく、できるだけ時間に制限はありますが、希望する方の声を聞くのがよろしいのではないかな、原則であります。

(中村委員長)

地域の方のご意見をお伺いするという、それに関してちょっとまとめさせていただきます。

やはり推進委員会の中で、ご意見をお伺いするという事でやらさせていただきます。ご希望があるところは事務局に申し出ていただくのがよろしいかと思いますが、事務局に申し出ていただいて、例えば推進委員会が3時間あります。そのうちの今まで地域の、方のご意見等で報告いただいていた、大体1時間ぐらいだと思いますが、その1時間を当てるということで、制限をしていきたいと思います。

要望が多ければひとつずつが、時間が少なくなる、そういう形でしょうかね。持ち時間が少なくなるということにはなろうかと思いますが、そういう形である程度まとまったご意見をお聞きする。あるいは検討途中でも結構です。例えば中野市さん、飯山地区さんとか、結構進んではいるけれども結論まではまだ時間がかかるということですから、その点もお伺いすれば、より具体的なところがわかると思います。

ただやはりすべて聞いていくというのは、ちょっと難しいので、時間で制限させていただきますと思いますが、事務局、これはどうやって周知をしたらよろしいでしょうか。これは報道の方をお願いするのが一番簡単かなと思いますが。ホームページでしょうかね。推進委員会のその開催のところに、こういう形でご意見をお伺いするという一文を入れていただくのがよろしいでしょうか。

(吉江高校教育課長)

期日につきましてはあらためて、委員長さんはじめ委員さん方とご相談させていただいた上で決まった段階で、ホームページ上で、開催日程に合わせまして周知を図らせていただくというようなことでいかがかと思います。

(中村委員長)

はい。わかりました。

(丸山委員)

それでいいんですが、さっき私は2回ぐらい言いましたが、1時間だとちょっと考えただけでも、相当あるわけですよ。そうするととてもじゃないけど、5分とかそんな程度の時間ですよ。そうするとさっきの、ちゃんとした資料に基づいての提案・分析みたいな、そういうことはかなり無理なんで、やっぱり1時間で1回は無理だなと思うんで、その辺もまた検討してもらいたい。

(中村委員長)

そうですね。

地域の方の日程もございます。どこか日にちを決めてでよろしいですか。そうすれば1回丸ごと取るというのは可能かと思いますが。

(吉江高校教育課長)

よろしいですか。

もしよろしければ、基本的に1回期日を決めていただいて、それでその場でどんな方々が来るかというような、いわゆる数的なものもございますし、また先ほど来お話がございましたように、個々に際限がない議論もあろうかと思しますので、それぞれの意見を基本的にはお聞きする場面はつくるとして、例えばまとめさせていただくとか、そういうような議論もあろうかと思しますので、その上で件数が決まった段階でやり方については、あらためてご相談させていただくということでいかがでございましょうか。

(中村委員長)

委員の皆さん、よろしいでしょうか。

はい。ご異議がなさそうなので、そのようにしたいと思います。

それでは、まずひとつ、ワンステップ進んだということですが。先ほど、中沢委員から、やはり具体的なところを委員が検討すべきということで、総合学科、それから多部制・単位制に関しては、ある程度議論が進んだと思います。

あまり魅力づくりの議論をしていないのではないかというご指摘もありましたが、私はそうは考えていなくて、やはり魅力づくりというのは、個々の学校というよりは、システムで考えていくのが推進委員会の役割ではないかなと思っています。

システムと言っているのは配置ですね。それから多部制・単位制というような制度。総合学科というような制度のことを言っています。各学校が、例えば地域との交流をする科目を設けているとか、そういうのはもうどこの高校も対等に大変熱心にやられている。

それから先生方も、努力をされていることですから、それを比較検討するという、そういう魅力ではなくて、システムの話が魅力づくりだと思うんです。ですからそれは、配置に関連していますので、今までずっと取り上げてご意見をいただいてきたと考えています。

やはり具体的なところへいきますと、なかなか代案を出すというのが、「敵をつくる」という言い方が、やはりまずいかなという感じがしますが、何か別の、高校改革とは別の議論を招きかねないので、なかなかそこへいかない。ですからかなり検討した上でないと、名前が出てこないで具体性が欠けている点が否めないなという感じがします。

ただこの推進委員会に任された議論といいますか、話し合いの内容がある程度は進んでいますので、このような形で例えば、今、坂城の地区ですね。それから旧4通学区ですか。それから屋代南という名前も挙がりましたが、4区についてはだいぶ話題になりました。

それから旧3区、長野南の話。それから長野市からの提案も、長野市教育委員会からのご提言もありましたし、この辺のお話が進んでいるというふうに思いますので、旧第1、第2通学区が地元でかなり検討されているということで、議論がまだこちらでは進んでないかなという感じがしますので、中沢委員がおっしゃるとおり、我々でもやはりきちんと検討しておくべきだと思いますので、この辺で魅力づくり、総合学科高校だけではなくて、ほかの魅力もあろうかと思います。

新たな科を設けるとか、最終報告にありますような別のものを検討してもいいんじゃないかというご意見、あるいは新しい提案ですね。そういうものが、この地区も含めてできればなと思っています。

地区で分けた場合には、まだあまり検討が進んでいないかと思います。この辺の議論をいただきたいというふうに思います。それと、ちょっとまた戻ってしまいますが、12月にこだわらずというのは、今日結論をすぐ出すということではなく、今後まだ検討していくということによろしいでしょうか。

地域のご意見を聞きながらというのは、確かに時間が足りなくなるという懸念はありますが、それでもやはりまだ数回あります。何とか頑張ってやるという、あるいは推進委員会の開催の回数を増やすというのもひとつ案があるかと思います。

この辺は、継続でご意見をいただくということでやりたいと思います。あと推進委員会として、多部制・単位制、総合学科について見学に行くというのが、事務局から提案されて今日知らされたわけですが、新聞には昨日ですか、もっと前に報道されているわけです。

これはよろしいでしょうか。皆さん、ご希望があればその計画に従って参加するという事で、これは推進委員会の月2回という、そこには含めずに別に設けていただくということです。これはそういうことで積極的に参加していただいて、見ていただきたいというふうに思います。

(中沢委員)

見学についてですが、いろいろな問題が潜めているもので、この委員会が全体で見学しても数は少ないし、意味はないなと思います。そうではなくて、委員の中で、あるいはまた教育委員会の中で「Aコース、Bコース、Cコース」を考えて、「この部分についてはこうだ、この部分についてはどうだと」いうように、委員がそれなりにきに関心を持っているところ、また勉強したいところへ行けば、それを総合すればもっといろいろな意見が出ると思うもので、そんなふうなことはいかがかなと、こんなふうに思います。

これは計画の中で参考にしていいただければ結構だと思います。

(中村委員長)

単純にまとめると、回数を増やしてほしいということですか。

(中沢委員)

グループでどうだという。そんなに何回も参加出来ませんから。

(中村委員長)

ただグループにしても、希望者を募るときには全員対象ということでしょうから、回数を増やして、見るところを増やしていただきたいということだと思います。

例えば県外へ出かける場合には、幾つか見てくることになるんでしょうか。そういうツアーになるんでしょうか。

事務局、どうでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今、中沢委員さんからお話をちょうだいいたしました。基本的にはそれぞれ例えば第一推進委員会がこの日に行っていただくという形ではなく、4つの委員会がございますので、4つの委員会さんの中で、それぞれ委員さん方のご日程の都合もあろうかと思いますので、複数回を考えて、その日程で合う日に行っていただくということで考えております。

それで今お話しいただきましたような、コースのバリエーションまでは実は考えていなかったのですが、ちょっとその辺も可能かどうか、検討してみたいと思います。

(中村委員長)

今の事務局のご説明ですと、中沢委員のご要望は叶えられると思いますので、お願いいたします。

それでは、この進め方といいますか、実施計画のスケジュールに関しては次回事務局からお示しいただくことでお願いしたいと思います。

どうでしょうか。第1区、第2区に関することで、議論をしばらく進めていくということとは、何かほかにご意見がございますでしょうか。

(柳澤教育主幹)

ちょっと確認させていただきたいのですが、実施計画のスケジュールということで今お話がございましたけれども、スケジュールについては、第1回の検討委員会にお示したとおりでございまして、その方向で進めていただきたいと、そういうふうに考えております。

今、委員長さんがおっしゃられたことについて、もう少し明確にさせていただけるとありがたいのですが。

(中村委員長)

第8回でしたか、ご希望がありましたが、もう一度ご発言いただけますでしょうか。

(坂口委員)

これからの、スケジュールのことでしたね。

(中村委員長)

坂口委員、もう一度すみませんをお願いいたします。

(坂口委員)

12月末までに推進委員会が報告を出すと。そのあと3月までに具体的に実施計画と策定。というような流れですね。

ですから12月に報告を受けて、そのあと具体的に19年度の実施から、もう少し具体的に県の動きが見えればいいなということと、そのあと報道でも若干出ましたが、先ほど青木委員さんから一番最初に今日も出ましたね。21年が最終年度、定時制は22年度ということですが、生徒がどういう状況で高校生活を送っているのかと。

報道等では若干出たりもしていますが、もう少し明確に私どもに。例えば中学校の現場とすれば進路指導にどうしても必要な資料になってくるかなと、そういうようなことで具体的なシミュレーションのようなものがほしいなと、そういうお願いだったと思うんですが。

（柳澤教育主幹）

委員会から報告もいただいていない段階ですので、それぞれ個々についてのシミュレーションというのはちょっと不可能かと思いますが、「一般的な」ということであれば、参考資料としてはお出しできると思います。

全体的なスケジュールは今のところ、最初に申し上げましたように、第1回の推進委員会でお出ししましたスケジュールにのっとなって、それぞれの各推進委員会とも進めていただいているということでございます。

（若麻績委員）

学校の現場として、坂口先生がおっしゃったとおり、保護者のほうもやはりそういう視点が非常に今、求められている情報であるということなんです。どういうふうに自分たちの子どもたちが、これから学校名とかじゃなくて、この再編されていく中で、どういう教育現場の空気に入っていくのかということですね。

「一般的な」という表現で結構ですので、例えば「多部制・単位制の学校はこう」、「総合学科はこう」、それから「一般校についてもこのようになっていくんだ」というような中で、一般校については例えばAとBがこうなった場合は、2年生、3年生はこうなっていくんだというものがわかるものが欲しいですね。

学校内容、それからひとつのある程度のシステムですね。それから総合学科、多部制・単位制についても含めて、18年、19年、20年、21年、22年ぐらいまで、その流れが保護者や子どもたちに理解が深まるような、そういう資料をいただきたいと思います。

（青木委員）

まさに総合学科というものは、中にある系統が、どういう系統を網羅させてスタートしていくかということが大事なことでありまして、特に塩尻志学館ではもう前からワイン醸造科ですか、ワイン醸造のそういった先端的ものの系統が、非常に塩尻志学館のひとつの個性というような表現をされていましたが、今の今後のスケジュールの中で、はたしてこの予定どおり、県教委が示す予定どおりのスケジュールでいくか、いかないかは別として、「行く」という前提の下に言うならば、いったいその中野の地に新設されるだろう総合学科高校は、どういう個性のあるその系統を新設していくのか、どういう系統を、味付けといいますか、メニューをそろえていくのかというのは、まさに現場の現地、地域との連携の中で組み立てていくものだと思います。

3月の策定のときには、長野県下4つの総合学科高校のそれぞれの系統さえも、もうおぜん立てされたものなのか。4月以降、ある程度大筋が決まった以降、地域との議論を進める中で、この地の第1通学区での総合学科は、こういう個性の系統を設けるんだ。第2はこうなんだということは、4月以降の話なのか、それをそのスケジュールの中でちょっとお示しをいただかないと、これは総合学科にノミネートいただいた中野市としたら、大



きな問題だと思っています。

（中村委員長）

事務局、コメントをお願いします。

（柳澤教育主幹）

今の、18年以降のことということでございますので、先ほど言いましたように個別の学校がまだ決まっていませんから、具体的なところということではお示しはできませんが、ひとつの例示できるようなものを、用意させていただきたいと思っております。

（丸山委員）

それはそれでいいんですが、この前議論、最後に私もちょっと言ったんですが、具体的に言うと、一番不安なのはAとBが統合してAのほうの校舎を使うときに、Bのほうの高校はどういうふうになるのかというものと、Bに入った子たちはどうなるのかと、いうふうなことの具体的なことも含めてだと思えます。やっぱり子どもたちの不安というのはね。

つまり下級生がいらないということになると、クラブはどうなるのかとか、そういうところですよ。それも含めてひとつあるので、それもぜひ出してもらいたい。

それからちょっと今まで気がつかなかったのですが、こういう問題は今日出せるのか、あるいはそのときに出してもらえばいいんですが、県会とのかかわりはどうなのか。つまり3月までに具体計画を策定するということは、新しい学校が決まりますね。A、BじゃなくてCという学校になりますね。それで校舎を使わないBという学校は廃校になりますね。そうするとその条例といいますか、学校名が変わったりなくなったりするんで、県会のほうのそれを議決することが必要だと思うんだけど、それをいつやるのか。

そういうようなことも含めたのがよくわからないので、それももし、今日それに触れられたら触れてもらえばいいですが、それも含めて次回のときをお願いします。

（中村委員長）

事務局、この返答はできますか。

（柳澤教育主幹）

あらためて次回提出させていただきたいと思えます。

（中村委員長）

前回の会議から引き続きの要望ですので、何らかの資料をいただいて検討したいと思えますのでお願いいたします。

（小山（壽）委員）

すでに以前もお願いをして、否定的な回答をいただいておりますので難しいとは思いますが、例えばA校とB校が統合するということは、校名が新しくなるわけですよ。それ

から教育課程がどういうふうに擦り合わせるのかということが出てくるわけです。

さらにA校とB校の中で、制服が異なっていたり、ひとつのほうは制服がある、片方は制服がない、ではそれをどうするのか。さまざまなことを教職員や保護者や生徒とも交えて、相談していかなければいけないという事情がある。

17年度末に、実施計画を策定して、そしてその上で今の条例改正等含めて、新たな募集定員を策定する。従って19年度スタートだと、こういうふうに言っているんですが、これは教育委員会の計画としては、そういう時間設定でいいだろうと思うわけですが、学校とすれば今のようなさまざまな問題を、ひとつひとつクリアしていかなければいけないわけです。

例えば飯山の場合だと、県の案は3校が一緒になるわけですよ。そのうち2校は、制服を持っていないんです。1校は、制服がある。それぞれ例えばこの推進委員会で、地域の方々の要望を聞くと、今、言っていますよね。ましてや決定が出されたら、地域の方々の要望を聞きながら新しい学校づくりを学校がやっていかなければいけないわけですね。

いかんせん1年という時間は、非常に短いわけです。ぜひその辺について、この前もお願いしたときに、ちょっと否定的なお答えをいただいておりますので、願望ということですが、弾力的に進めていただきたい、そういう願いを強く持っております。

(清水委員)

ただ今の小山(壽)先生の意見にまったく同感なんですけど、地域のほうにおきましても、学校名がたたき台とはいえ出た段階で、当初は白紙撤回一辺倒だったんですね。それが10月のこの時点まできて、初めて何となく、ある程度の方向性というか、そういったものが議されて、具体化してきているわけです。

そういった方々の意見を何らかの形で聞くということがようやく決まりましたけれども、この10月の時点ですよ、それが。あと数カ月で、それがまとまるということは、ちょっと思えないんです。

これも、小山(壽)先生がおっしゃっていましたが、否定的なことで対処されてしまいましたが、当初推進委員会の1年間という信ぴょう性というものを、私は質問させていただいた記憶があるんですが、そのときに県の教育委員会のほうとしては、「当面と」というお話をされたんです。

いろんな陳情書、または個別にお話を聞く中で、期間にこだわらずにじっくりとやっていただきたいという意見が圧倒的に多いんですよ。私は思うんですが、これは先ほどの資料の中にあった、資料2のところですが、新潟県の多部制・単位制の件ですが、先ほど若麻績さんにご質問されて、これは一遍になったんですかと言ったら、ご説明の中で「いや、順を追ってやられた」というご説明がありました。

長野県の高校改革プランについても、順を追ってできるところからやっていくという方法はできないのかどうかあらためてご質問させていただきたいのです。

(中村委員長)

事務局、お願いします。

(吉江高校教育課長)

よその県のやり方が、長野県に参考になるかどうか分かりませんので、実は先ほどご説明申し上げなかったのですが、新潟県の場合には教育委員会が、以前は前の年に統合計画を出して、それを着実に実施していったというのが新潟県のやり方です。

それが最近では3年前に、実施計画をはっきり出しちゃいまして、こういうような委員会とかにかけることはなくて。それで教育委員会として決定したものを、そのまま陳情とかを受けても、確実に実施していくというのが新潟県のやり方です。

ですからそのやり方をしているものですから、ある意味一律ではないものの、確実に新潟県は学校数を含めて減ってきている。さらには昔は新潟県は分校がありまして、さらに申し上げますと、定時制も夜間定時制があったのですが、先ほど見ていただきましたように、夜間定時制も確実になくなってきて、多部制・単位制の独立校に移行してきているというのが実情です。

ですから必ずしもよその県のやり方とイコールというようなことは一概には言えないと思います。このやり方がいいのか、新潟県のやり方がいいのかというのは、もちろん議論はありますが、新潟県のやり方はそうであったということで、ご理解いただきたいと思います。

それともう一点、前回の議論、これはまさしく先ほど来ほかの委員さんからもお話をちょうだいしてありましたように、私ども第1回目の5月29日の日にも、実のところ12月まででお願いしたいと申し上げつつ、括弧書きとさせていただいた経過がございました。

1月の初、中旬までも場合によればあり得るんじゃないでしょうかというお話も申し上げてございまして、それぞれ5月の29日の説明会の折に、こんなスケジュールでお願いできないかというようなことを申し上げた経過がありまして、また本日の第一推進委員会の委員さんの中には、確かに厳しいというお話もありつつも、当面そのスケジュールでというようなお話もちょうだいしておりますので、そんなスケジュールでご検討いただければと考えている次第でございます。

(中村委員長)

幾つか委員さんから検討期間について、先へ延ばす、あるいは段階的にというご意見を何回かいただいておりますので、今日取り上げさせていただきましたが、私は基本的には最初に申し上げたとおり、12月末までにやっていくというのが委員会の役割ではないかなと思っています。

やはり教育委員会が決めて実行していくという、そのやり方も許されるのだと思いますが、今回は教育委員会は県民の意見を聞きながら、いろいろな会議を立ち上げて、コンセンサスを得ていくというやり方を取っておられます。

それにはコンセンサスを得る努力を、我々がしなければいけないと思います。それはやはり期日を決めないと、どんどん先送りになってしまう。何も決まらない。もちろん盛りだくさんで検討が深まらないので、何回か余分にやるということは許される範囲でやるんでしょうけど、今のところはまだ12月末を目標にやれるのではないかなと思いますが、いかがでしょうか。

(若麻績委員)

私も、こういった議論は時間をぴしっと区切って、制限された期間に集中的に議論することには、理解を示している1人であります。

それと同時に、今回これから地域の意見を聞いていこうという、ひとつの多きな流れができるんですが、委員長にお聞きしたいのは、これは「言ったから、ここで聞いただけ」にすませないということなんですね。

聞いただけにすませては、いけないと思います。責任の重さというものがありますが、私たちはその辺のことでこれから進める中で、ひとつ設定した時間内で終わらせていくこの会議として、その辺の配慮といいますか、それはどのように考えられているのか、お考えでも結構ですでお聞かせ願えますか。

(中村委員長)

先ほど市川委員でしたか、地域の意見を聞くにつけ、理解が深まったと。また自分の考えも修正する部分があった。さらにはそのご意見に対して疑問もあるというご発言がありました。そのとおりだと思います。

ですからここでご発言をいただいたことに、我々がまた提案者側に質問もするということで、議論はするべきではないかなと思います。

そういう取り扱い方で、聞いてしまえばただ聞くことにはならなくて、考え方にかなりの影響を受けると思いますので、それも含めて十分真摯に受け止めていけるのではないかなと思います。

(宮本委員)

今回の推進委員会もあとわずかで終わりになるのですが、回数的に月に2回、そしてあと今日が9回目ですから14回を予定としていますので、4、5回ということではありますが、今度皆さんの意見も聞くという機会もあったり、見学会もするということがありますので、具体的にどのような魅力づくりとか、あるいは統廃合の問題なんかも意見を出さなければいけない段階に入るわけです。

その予定を見ながら、月2回ということですが、月3回というようなことも検討していかなければいけないのではないかなと思っていますが、どうでしょう。

(中村委員長)

開催計画を立てることは可能かと思いますが、委員の出席の人数が減るというのも、また考えなければいけないことだと思いますが、3回もやろうと思えば可能。それはご意見を伺ったほうがよろしいですか。

(丸山委員)

月3回がいいかどうかは別として、さっき言ったように月3回になると、また資料が読み込めなくなる、それはいいとして、今、12月を延ばそうと決める段階でもないし、そうかといって12月にやるという、確定しちゃうということも、わからないということじゃないですか。

私は個人的には、とてもありがたいとは思いますが、それはまとめ方の内容にもよりますよね。だからもう少し、確かに今の段階で県教委が聞いたって、委員長さんに聞いたって、そりゃあ12月を延ばしましょうとは言えないでしょう。

ただ、とてもこれは無理だよという状況を、我々は判断として持っているので、現段階はそうではなくて、今は地域の声を聞くとか、見学するとかいう中で、少なくとも今この推進委員会は確かに議論が一番大変だから、幾つかたくさんあるんで、確かにほかの委員会と比べたら遅れているんですよ。課題がたくさんあるんで。

現実と言ったら、もううんと乱暴なことを言うと、候補案の議論のほんとに本格的に議論を深めたのは、坂城問題だけです。そうじゃないですか。長野南も中条も、当然中野も飯山もあの候補案について、どういったことが問題かというように坂城の問題ほどここで議論していないですよ。だからそれを、これからやらなければいけないですからね。

例えば長野南、何で長野南なんだということやね。総合学科は中野でいいのかとか、総合されて工業科がどうなるんかとか、そういうのは今までも幾つか出ているけど、本格的には坂城以外、ほとんどやっていないんですよ。

そういうことをやっていくと、やっていく中で地域の意見も聞きながら、それがもうちょっと先で見えてくるかどうか、12月ということがね。そこでやっぱり12月にするのか、延ばすのかということを決めるということかと思います。

だから今、どっちも決められないと。頑張ってるけど。やっぱりそれは頑張ってるから、早くなんでもいいやというわけじゃないですね。やっぱりそれはきちんとやっていくということで、その中で3回となったらしょうがないけど、やだとは言えないけど。3回はきついなと、正直な話。

（塚田委員）

私も、一応我々5月に諮問されたときに、期限についても12月ということで受けた経緯がありますので、取りあえずやはり12月を目標にすべきだと思います。それでまとまらなかったらどうするか、それはまたそのとき考えればいい。ぜひ現時点では、やはり12月ということと、それを受けた経緯もありますので、それをまず目標に話を進めるべきだというふうに思います。

（中村委員長）

いろいろなことに触れると、どんどん話がふくらんでいってしまいますので、この件に関しましては検討しながら推進委員会としては、任された議論を進めていくというふうにしたいと思います。

特に期日を決めるというか12月末は目標ですが、1月初旬、中旬も含めて検討しながら進めていくというふうに思います。

それで何回か具体的な議論に入れるように挑戦はしてきているのですが、いつもだんだん総論的なところへ移っていってしまいます。これは仕方がないかなと思いますが、もう1回具体的な議論に移れるように、またご提案を申し上げますが、どうでしょうか。地区ごとの議論、第3区、第4区は少しは触れてきたんですが、1区、2区通学区がほとんど触れていないように思います。総合学科高校等では話題に上っているんですが、そういう議

論の切り口、あるいは今日の会議の冒頭のほうで、質問の中で出ましたが、工業科ですか。職業科に関する議論は、まだかなという気がしますんで、その辺から総合学科高校の魅力につないでいく。どうでしょうか。

（塚田委員）

前々回の、中野の総合学科ということで、もし工業科がなくなったら経済界はどうなるんだろうというお話をいただいたので、この資料1なのですが、A社、B社、C社のこの中野実業の学校要覧に載っていた就職先で、たまたま社長さんを知っていたものですから、電話で聞き取り調査をしました。

本来は口頭でご報告するつもりだったのですが、前回休んだものですからメモとして教育委員会のほうから発表していただいたのですが、A社は電気工事の会社です。B社は、多分農業機械だと思うんです、これは製造業。C社は、これも水回りの製造業です。

まず中野実業高校の機械土木、電気ですか、出ている卒業生の実態はどうなんだということで、お聞きをしました。それから今、我々の委員会の中で、中野と中野実業を統合して総合学科ということを検討しているんだけど、そうなった場合御社にとっての影響はどうですかと、そういう2つでお聞きさせていただきました。

それで、それぞれそのような回答です。先ほど森野委員さんから、即戦力ということにこだわっておられましたけれども、これについてははっきり申し上げると、高校生は卒業しても即戦力にはならないというのは、これははっきり言っておられる。

私も商売をしておりまして、高校生を採用しておりますが、これは中野実業に限らずどこの高校生でも、卒業してすぐ使い物になるということはない、ということは事実です。

（中村委員長）

この辺の議論を進めていってよろしいでしょうか。

ほかにもっと、最初という意見があれば。

（牧 委員）

関連でお話しさせていただきますが、D社はうちなんです、これは前は委員会でお話をさせてありましたからいいんですが、今、塚田委員のほうからお話がありましたが、実際は必ずしも高校だからすぐ即戦力にならないというのじゃなくて、短大を出ても専門学校を出ても、大学へ出ても、即戦力にはならないです。

ただその期間や、ある部分の専門的な職種といいますか、そういう段階になりますと、そんなに長い期間じゃなくても、仕事をやっていただく方は、高校の方でもいるんですよ。高卒でも、あるいは短大でもいるんですよ。

しかし「工業科じゃなくちゃいけない」という部分というのは、かつての時代、今から20年とか30年前の採用した時代から見ると、製造業のみならず、今回は製造業とサービス業というか工事業が出ておりますが、確かに違ってきていることは事実なんですよ。

やっぱり今日の製造業にしても、いろいろな面で装置、機械がシステム化され、ソフト化されてきておりますから、かなり高度なマシンのオペレーションにしても、いろいろな数字をいじったり、コンピューターを駆使したセッティングをするわけで、通常システ

ム制御とかいろいろなこと。

機械の仕組みを知って機械をコントロールして加工をするとか、いろいろな形があるんですよ。あと通常の検査業務といっても、研削機とかそういうものを取り扱うとか品質保証をするだとか、目で検査するとか顕微鏡で検査するというような仕事についても、そんな簡単にできるものじゃないんですよ。

ですから実際の現場の具体的な仕事についても、さまざまないろいろな訓練をして、それでようやく覚えて、慣れて、ようやく一人前という形になってくるんですが、当社もそうなんですが、中野、須坂、長野周辺の高校から、昨今になると採用しておりますが、多種多様な人材を採用するということで、人事のほうには話をしておりますが、農業高校もあれば、商業高校もあれば、あるいは工業高校もあれば、普通高校もあれば、8名採るとすれば6校ぐらいの高校から採用したのです。

かつては学校長推薦があれば高校の場合はほとんど採用したという経過があるんですが、最近はなかなか就職もつけないという状況の中で、企業の求人数も減っておりますので、なかなか会社側と学校の生徒数が合わないというようなことになって、全員採用するような状況じゃないものですから、面接選考、ペーパー選考いろいろさせてもらっています。

いずれにしても「製造業だから工業科だ」、「サービス業だから商業科だ」と。「農業関連だから農業科だ」というような状況になってないことは事実なんですよ。多種多様な人材となると、普通高校で学んだ生徒でも非常に成績がいいとか、積極的だとか、あるいは商業校でもスポーツマンであったと、インターハイへ出たと。

いろいろな環境の中で、企業はいろいろな採用条件の中で、成績がよければ、一番いいからと上から採るのではなくて、いろいろな条件の中で採用を決めていくんですが、しかしながら成績も入りますからね。

ですから工業科の中で特に、うちは製造業だから電気と機械と化学がほしいと。現場サイドからそういう話があっても、やっぱり職種によっては、そういう普通高校から来たのが仕事をやっていたり、あるいは農業高校から来た子が、そういう仕事をやっていたりしますので、ですから基本的にはやっぱり工業科というのは、ここに書いてありますように非常に魅力はあるんですが、じゃあいらないのかと言えば、「あればあったで越したことがない」というような表現の企業が多いのですが、そんなに大きく、深刻になるほどの環境じゃないということは間違いなく言えると思います。

これは我々、経営者同士のいろいろな話の中でも、そういうことが出ておりますので、ですから若い人材をできるだけ地元から採用したいということも願いとしてありますし、企業は新陳代謝しなければいけないし、継続しなければいけないという問題もありますから若い人材を登用するということはもちろん大事でありますし、その中でもやっぱり地域から採用していきたいとのもあります。

そんなようなことです。

(中村委員長)

中野実業高校が、この資料1に書かれていますので、かなり具体性を持って議論を進めていけるのではないかと思います。

やはりこの職業高校、職業科、今の工業の話でしたが、このへんで少し議論をしたいと

思いますけど、よろしいでしょうか。これにはやはり、坂城の多部制・単位制も地域の企業と協力してというようなことも入っていますし、かなり広い範囲のシステムも考えなければいけない話ですので。

（中沢委員）

よろしいでしょうか。

その前にちょっとお願いしておきたいのですが、先ほどいろいろ現地からのご意見を聞くということに相決まったわけでございます。私が坂城の多部制・単位制について、もっと長野市や須坂や千曲市があるじゃないかという中で、ひとつの例として屋代南高を挙げた経過がございます。

その地域にとっては大変なことだと、こんなふうに思いますので、そういった多部制・単位制というものは、「こういうものなんだよ」ということを、例えば私は生涯学習も頑張っていくんだよと。あるいは能力に応じて、いろいろなものができるんだよというお話はしましたけれども、課長さんによく屋代南の皆さんに「こうだよ」ということを、親切に事細かく説明しておいてほしいなと、こんなふうに思う次第でございます。

また地域の皆さんにも、こういう学校なんだよということを理解していただきたいなと思いますので、そういったアフターケアだけは、よろしくお願いいたします。

（丸山委員）

時間がないので、次回の議論への要望みたいなものです。資料1について、私はさっきちょっと言いましたが、今、塚田さんやら牧さんのほうからお話のように、それは企業の状況というのはよくわかりますが、私はこの資料を読んで、むしろ工業科の在り方の問題だと思っていたんですね。

工業科がいらないということではなくて、今、工業科も普通科もそうですが、ほかの工業科もそうですが、今の職業科や普通科がいいというふうに、現場の教員として思っているわけではないんですね。

例えば普通科の中で、一定の職業的な教育もやらなければいけないという議論も、私たちはしていますし、工業科が地域にあることの意味というのは、このことを基にしながら、この資料で当然社長さんたちが工業科をいらないと言っているわけじゃないというのはよくわかるんですね。

いろいろこれをよく見ていくと、やっぱり工業の基礎や、そういうものをきちんと学んでもらいたいということだと思うんで、やっぱり職業科の在り方みたいなものも、魅力づくりとの関係ですごく今、大事だと思うんです。今のような職業科の在り方でいいのかという問題は、だから総合学科だという話にはならないと私は思うんです。今の職業科を、きちんとどう改革をしながら、内容を充実させて魅力あるものにしていくのかと、今までなんとなく片仮名文字をつければ、何とか新しい学科でいいような雰囲気だったけど、それもうまくいってない状態がかなりあるわけです。

それで、もっと工業なり農業なり商業なりの、基礎的なことをきちんと学べるようなことをわれわれ現場でも努力しなければいけないし、そういう点で工業を考えるべきであって、私は前から言っているようにそういう点でいくと北信地区で工業高校が1校になるこ



とは、これは大問題だというふうに私は思いますので、ぜひその辺の議論も次回お願いしたいと思います。

（中村委員長）

今ご意見いただきましたが、確かに今日は時間になりますので、職業科に関して考えていきたいと思いますが、ほかによろしいでしょうか。今日は冒頭のところでそういう意見がありましたので。

（森野副委員長）

端的に申し上げます。

今のご説明、あるいはご意見等お聞きする中で、私ども工業科がいないというわけではないので、結局ここでは総合学科ということで言いたいわけなのですが、この子どもたちの心は非常に動いているわけですね。その中で選択の幅が広がってくるというようなことで、この中野方面でよろしいのじゃないかということで考えられると思います。

結局このころの心理状態というものは非常に複雑ですから、大きな人間形成として大事な時期でありますので、こういった複合的な学校が必要ではないかということで冒頭申し上げたわけであります。

以上です。

（中村委員長）

では時間ですので、工業に関して私は工学部ですので意見をまとめてきたんですが、今日は時間がないので次回説明いたします。

ほかになにか取り上げていきたい議題等ありましたら今のうちに。よろしいでしょうか。

（宮本委員）

議題ということでもないのですが、先日屋代南高校の同窓会に呼ばれて、話を聞いていく中で幾つか県にもお願いしたいということがありました。

ひとつは、多部制・単位制と総合学科についての設置ということで話していますが、名前が出たところについては論議が高まっているのですが、急に名前が出たところとか、あるいは全県民の中ではなかなか浸透しないところが事実ありまして、反対にマスコミ等の、例えば多部制・単位制についても、初めの形容詞が「不登校生が多く」とかいろいろなマイナスイメージが出ていまして、ぜひそこでも言われたのですが県の教育委員会でも改革が進んでいる中で多部制・単位制のことについての、よく県会でも意見広告が出ますが、「教育改革の進み具合」的なオフィシャル的な要素を含んだ、宣伝というよりも発信みたいなものをしてほしいということがひとつありました。

可能かどうか分かりませんが、検討していただきたいと思います。

(中村委員長)

私も気になっているのですが、推進委員会でご議論いただいているからということも確かにそうなのですが、県の教育委員会としての言葉で発信していただく。今、宮本委員がおっしゃったとおり大事なかなと思います。

説明は推進委委員会を盾にして行うのではなくて、教育委員会が直接行なう部分も重要ではないかというふうに思います。それでは次回、今挙げたようなことを検討していきたいと思いますが、やはりできるだけ具体性を持ってやりたい。

もちろんシステムとして全体を考えることは大事なのですが、時間が限られていますので、今挙げている検討材料がどんな問題があるのか。それに触れながら議論を進めていきたいというふうに思います。

ほかにございませんか。なければ、よろしいですか。

それでは、次回の予定を事務局のほうで説明をお願いいたします。

(三澤教育支援主事)

次回についてですが、26日以降のところを考えさせていただければと思っております。また調整させていただきまして、ご連絡をさせていただきたいと思います。

(中村委員長)

ありがとうございました。

それでは、第9回の推進会これで閉じさせていただきます。

どうもありがとうございました。